



TITLE:

アバストマーニ天文臺點描

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. アバストマーニ天文臺點描. 天界 1939, 19(220): 304-306

ISSUE DATE:

1939-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167848>

RIGHT:

☆

アバストマニ天文臺點描

☆

かつて我が誌上に記した如く、新興のソヴィエト聯邦は、1925年前後から國策の一つとしてか(？)、國內一帯に天文學の研究と普及とを奨励し、其の結果として、近年同國には新天文臺の續現、學俗兩方面の天文家の輩出等が、殊に著しい。其の一つとして茲に紹介するものは、南露ジョギヤ國カノビリ Kanobili 山上に新設されたアバストマニ天文臺である。

元來 Georgia といふ國は、千年以上の歴史を有つ古い國であるのだが、長い間、ロシア領カウカソス地方の一部として、殆んど世に知られてゐなかつた。之れが、歐洲大戰後、新たに一獨立國として南部カウカソスに存在することとなり、更にソヴィエト革命の餘波を受けて、赤化し、遂にソ聯邦の一部となつたものである。

さて1930—1932年の頃、レニングラード國立天文研究院では、聯邦内の諸所の天文家たちと協力して、低緯度の地に、天體の物理研究を主とする新天文臺を創立する計畫をなし、諸所を調査した結果、上記のジョギヤ・ソヴィエト國 Abastumani 市外7軒の Kanobili 山上が選ばれ、1934年に建築が始まり、1935年に落成、まもなく研究觀測が開始された。此の天文臺は海拔17000米、東經 $42^{\circ}45'$ 、北緯 $41^{\circ}43'$ であり、歴史的な事實としては、第19世紀末、S. P. Glasenap 氏が此の Abastumani 市で二重星を觀測したことがあり、此の成績を見て斯道の大家 S. W. Burnham 氏が此の土地の空氣を優秀なものと判定したことがあつた。(A. & Ap. 117)

新天文臺は40種ツァイス製の屈折機(1931年製、焦點距離680種)、20種天體寫眞儀($F=1.0$)2臺、ヘール式の分光太陽鏡(米國パサデナ市 Howell 會社、1935年作)、16種シミット望遠鏡($F=1.75$)、33種反射鏡(1932年作、ロシア製)等があり、尙ほ將來には強力屈折寫眞儀、太陽望遠鏡、大型反射鏡等が設備される筈である。目下の研究事項としては、33種反射鏡のニュートン焦點にて大熊 W 型の變星の寫眞觀測、同機のナスミス焦點にて光電光度計による光度及び色度の觀測、暗黒星霧中の微光星の色指數研究、太陽觀測、其の他、遊星型星霧や新星の理論研究等が行はれてゐる。臺長は E. K. Kharadse 氏、臺員

は Sh. G. Gordeladse (助役), V. B. Nikonov, M. A. Vashakidse, V. M. Bodokia, Sh. Chkhaidse, K. G. Zakharin 諸氏である。

近年、此の天文臺より發表されるブレテン第1第2號を受け取つたが、其の内容は下の如くで、其の研究の大略が知れる。

大熊 W 型の食變星の寫眞光度観測 (10星)

Nikonov 及 Dobronravyn 兩氏、ベガス座 BB 星の寫眞光度曲線と要素。

極小 = J. D. 2426559.240 + 0.3614992 × E 極大 10.32, 第一極小 11.40,
第二極小 11.29.

Nikonov 及 Bodokia 兩氏、駁者座 Ap 星の寫眞光度曲線と要素。

極小 = 2423080.520 + 0.5692932 × E 琴座 β 型である。

Bodokia 氏、鷲座 ○○ 星の寫眞光度曲線と要素。

極小 = 2426892.059 + 0.506795 × E

Bodokia 氏、乙女座 AG 星の寫眞光度曲線と要素。

極小 = J. D. 2426418.991 + 0.642640 × E 極大 7.40, 第一極小 8.35

第二極小 7.97 琴座 β 型!

Bodokia 氏、ペルセ座 ZZ 星 (之れは我が國の中村要氏が 1922 年に發見した變星である)

極小 = J. D. 2428144.4312 + 0.5771 × E 極大 11.71, 第一極小 11.92,

第二極小 11.82 琴座 β 型!!

Nikonov 氏、白鳥座 P 星の光電観測。

振幅 0.15 に達する變光を確認す。

Kharadse 氏、白鳥座 P 星のスペクトル中の吸収線の變移。

視線速度と電離ポテンシャルの關係確認。但し速度と強度とは無關係。

P. G. Kulikovsky 氏、水瓶座 CY 星。

最短週期 (0.06103833) のセファイド式變星なり。

Sh. G. Gordeladse 氏、新星の爆發中に噴出する質量の推定。

M. A. Vashakidse 氏、F 型星の空間分布。

P. P. Dobronravyn 氏、星の寫眞光度観測法について。

Sh. M. Chkhaidse 氏、アバストマリニに於ける空氣の濁度系数。

マイケルソン式アクチノメータにより 1934 年中 600 回観測, Linke 氏の式にて計算す。

E. K. Kharadse 氏、アバストマリニに於ける大氣の研究。

寫眞的には透過率 0.808 ± 0.013 , 眼視的には 0.878 ± 0.014

故 V. M. Bodokia 氏、エリダン座 UX 星の寫眞光度曲線と要素。

極小 = J. D. 2427425.291 + 0.4452786 × E 極大 10.68, 極小 11.20

〃 〃 , 髮座 RZ 星。

極小 = J. D. 2425005.524 + 0.3385057 × E 極大 10.00, 極小 10.70

“ “ , 駁座 AII 星.

極小 = J. D. 2425271.366 + 0.49417 × E (Prager 氏, 1929年) 極大 10.47,
第一極小 10.72, 第二極小 10.68.

“ “ , 髮座 SS 星.

極小 = J. D. 2428584.492 + 0.412789 × E (Prager 氏, 1929年), 極大 10.92,
第一極小 11.52, 第二極小 11.49.

“ “ , 水瓶座 UW 星.

1935年8月中340枚の寫眞より, 光度 10.84 に一定して, 變光せざるを見る.

V. B. Nikonov 氏, 1936—1937年中の白鳥座 P 星の光電觀測. 殆んど變光せず.

“ “ , 牛座 ε 星の光電觀測. 減光系数 0.740 を用ふ.

極小 = J. D. 2399607.538 + 3.9529507 + E - 0.0255 sin (0.2637 × E - 59.1°) 第3體
の影響あり?

V. A. Ambarzumian 及 Sh. G. Gordeladse 氏, 散開星雲と宇宙吸收.

Sh. G. Gordeladse 氏, 新星爆發最終期の溫度.

“ “ , 新星爆發中に噴出するエネルギー量について. 略々 10^{44}
10⁴⁴エルグ.

M. A. Vashakidse 氏, 銀河中心の方角にて銀河面に直角に A, F, G 型星の分布.

E. K. Kharadse 及 M. A. Vashakidse 兩氏, 16吋屈折機の8吋對物玉の球面收差
とアスチグマチズム研究.

Sh. M. Chkhaidse 氏, 太陽輻射と大氣の透明度.

天文臺, 1932—1937年中アバストマ I = 天文臺の研究狀況報告. (山本)

盂蘭盆會とは

盂蘭盆會は盂蘭盆經の說に基いて毎年舊曆七月15日(舊曆)に佛および十方の衆僧に供養して父母乃至七世父母の冥福を祈るを以て本旨とする法會, 盂蘭盆は詳しくは烏藍婆拏(ウランバナ)で救倒懸と譯し, 身を倒に懸けられたような激苦を救ふの意味であるといはれる. 行事の起原としては盂蘭盆經に釋尊十大弟子の一人なる目連が母の在所を見るに餓鬼の中にあつて苦しんでゐたのでどうかしてこれを救ひたいと釋尊に申出たところ, お前一人の力ではどうにもならない, 七月15日に七世の父母のために飲食百味五菓を具へ十方の衆僧に供養し, その力にすがれといはれた. よつてその通りにすると果してその母は餓鬼道の苦を免かれることができたこと記されてある.

この法會は初めインドに起り, 支那, 日本に傳はつたもので, 支那では唐の代宗の時代から行はれし荆楚歲事記]七月15日の條に僧尼道俗こごこくが盆供を營むといふ記事が見えてある. わが國では齊明天皇の三年, 初めて盂蘭盆會を設けた由が日本書紀に見えてゐる.

盂蘭盆會はそもその初めは佛および十方の僧に對する供養であつたが, 後世になり, 一般の在家で行はれるようになってから日本, 支那ともにいつか考妣祖先を祭る法會となり, 殊にわが國においては祖先崇拜の國民性と適合して, 魂祭, 精靈祭の名で呼ばれし盆暮[盆と正月]などといはれるくらゐに年内を二分する大きい行事として今日の盛行なみるに至つてゐる.